

資料紹介『機関千種の実生』

山田和人

書誌

種類 絵本（竹田からくり絵画資料）

寸法 縦一七・七種 横一二・九種

冊数 上中下、三冊（一冊に合綴）。

丁数 一五丁。

丁付 柱刻に「からくり」とあり、丁付を「一〇十五」まで記す。

形態 中本。袋綴じ。

題簽 元題簽。

題簽寸法、縦一四・三種 横七・〇種。中之巻と下之巻の元題簽がある（後述）。

刊年 明和四年（一七五七）三月（後述）。

所蔵 東京都立中央図書館。

分類番号 「東京誌料5894-2」

資料紹介『機関千種の実生』

備考 本書には次の印記がある。表紙見返しに「東京誌料／19364／31・11・24／東京都立日比谷図書館」。

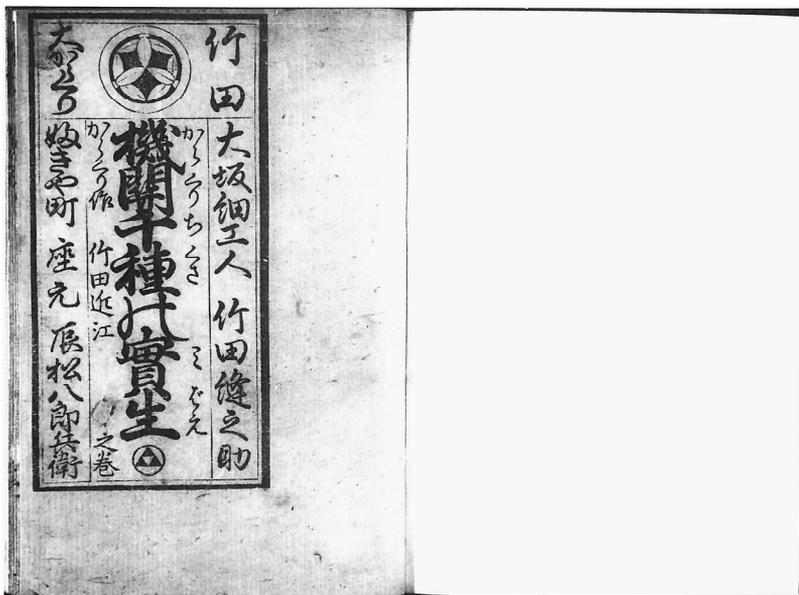
なお、題簽は元題簽であるが、上中下三冊のうちの二つの題簽が残っている。だが、上之巻に相当する表紙に貼られているのは中之巻の題簽であり（虫損しているが「中」と読める）、中之巻に相当する表紙には題簽が欠落している。下之巻の題簽は所定の位置に貼られている。現在、中之巻と下之巻の題簽は備わっているが、上之巻の題簽が失われていることになる。

刊年については、子供役者が、明和四年閏九月竹田近江大掾藤原清一の番付や、明和五年正月刊の役者評判記『役者党紫選』と一致するので、明和四年（一七五七）と推定される。なお、同年刊行の『若楓東雛形』表紙見返し口上によれば三月の興行とわかる。

資料紹介にあたって、本絵尺しの画像を先に掲げ、後半に翻刻を

掲載した。絵尽しの場合、絵と本文を一体のものとして理解すべきであるので、画像中の本文に近い位置に翻刻本文を配置することにした。翻刻に際して、現在通行の字体としたが、一部旧字をそのまま残したこともあることを断っておきたい。翻刻の後に、参考までに簡単な演目解説を記した。

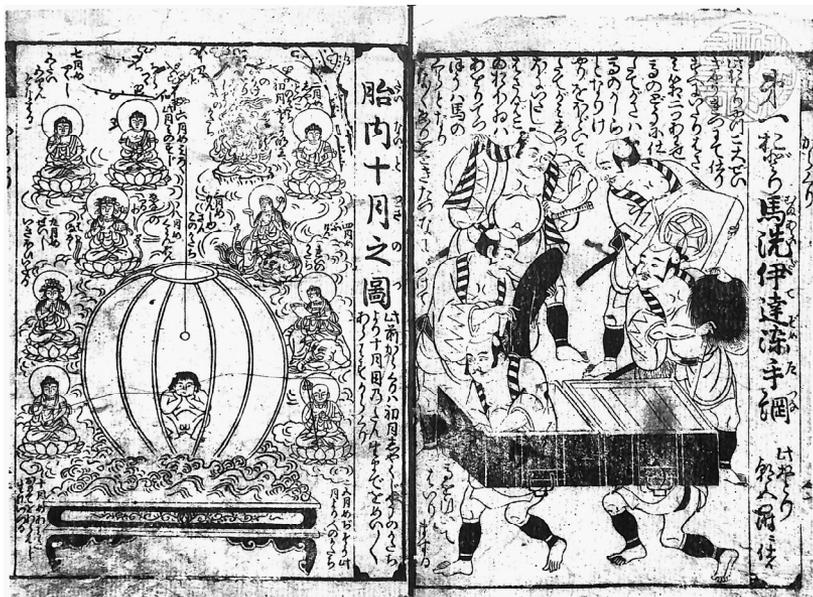
最後に、本資料の掲載許可を認めていただいた東京都立中央図書館に感謝申し上げます。



(表紙)

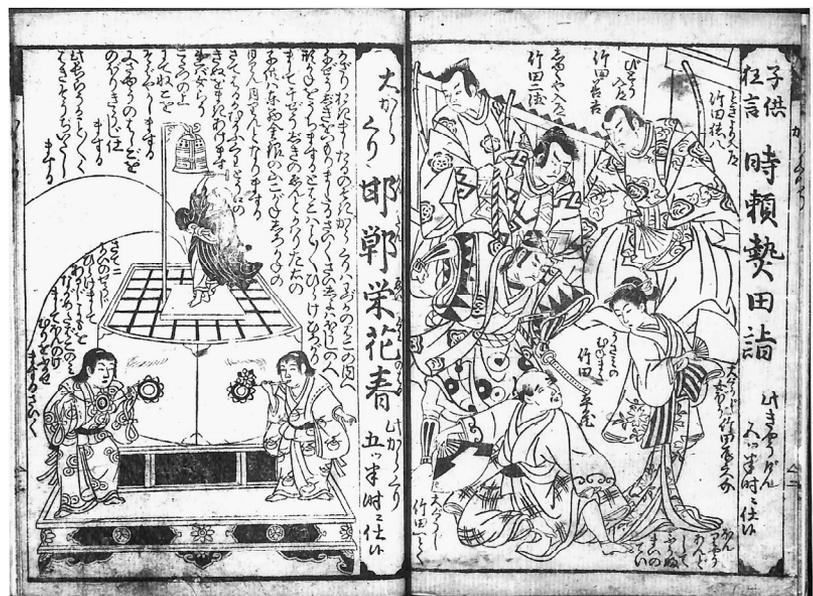


(1才)



(2オ)

(1ウ)

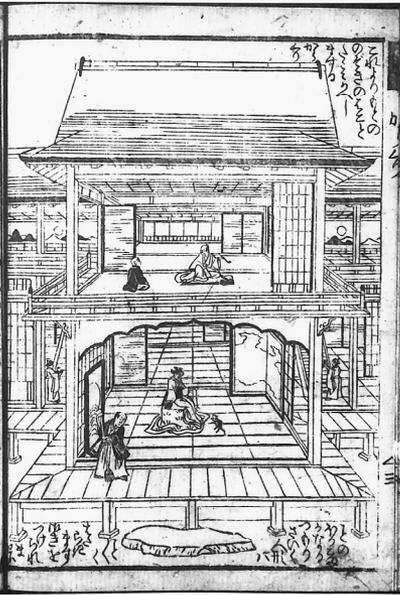


(3オ)

(2ウ)



(4オ)



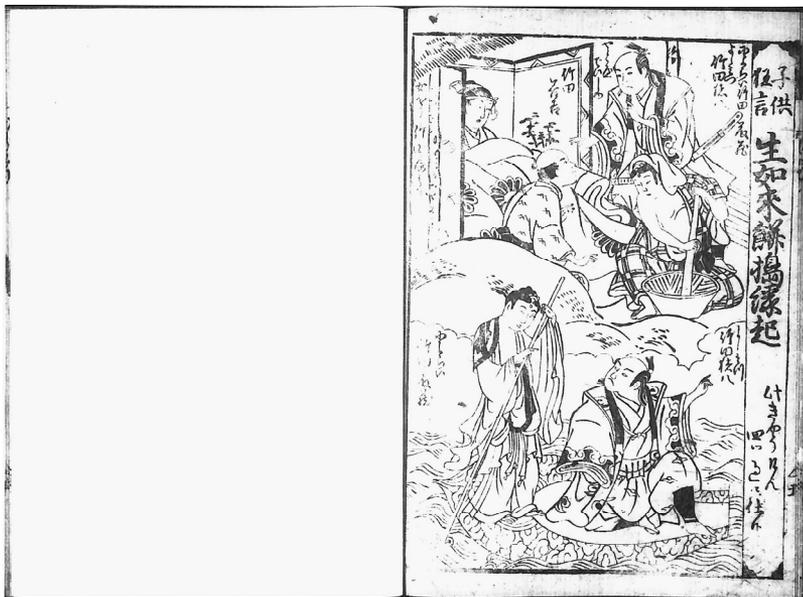
(3ウ)



(5オ)



(4ウ)



(5ウ)

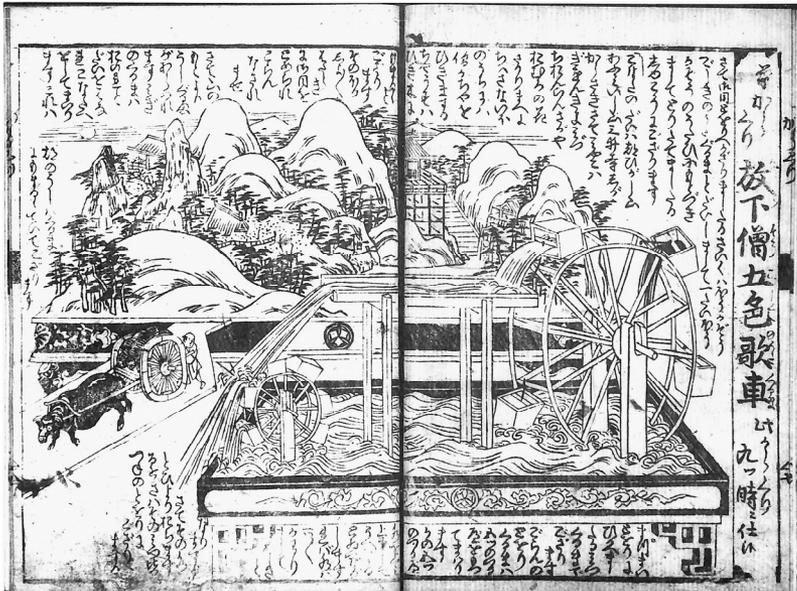


(6オ)



(7オ)

(6ウ)



(8オ)

(7ウ)



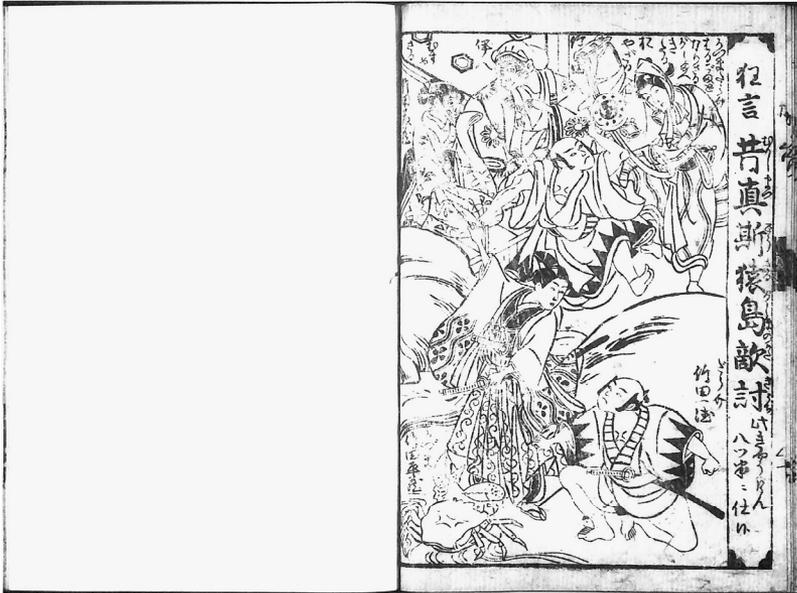
(9オ)

(8ウ)

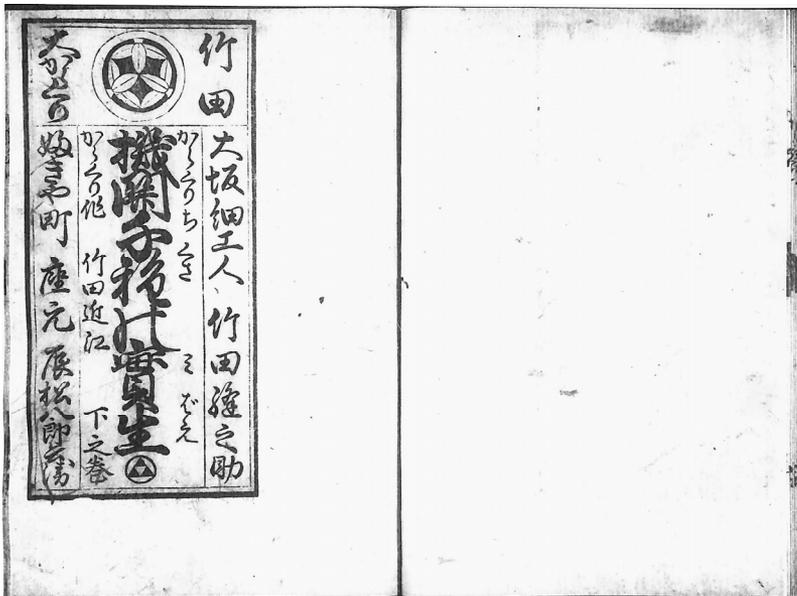


(10オ)

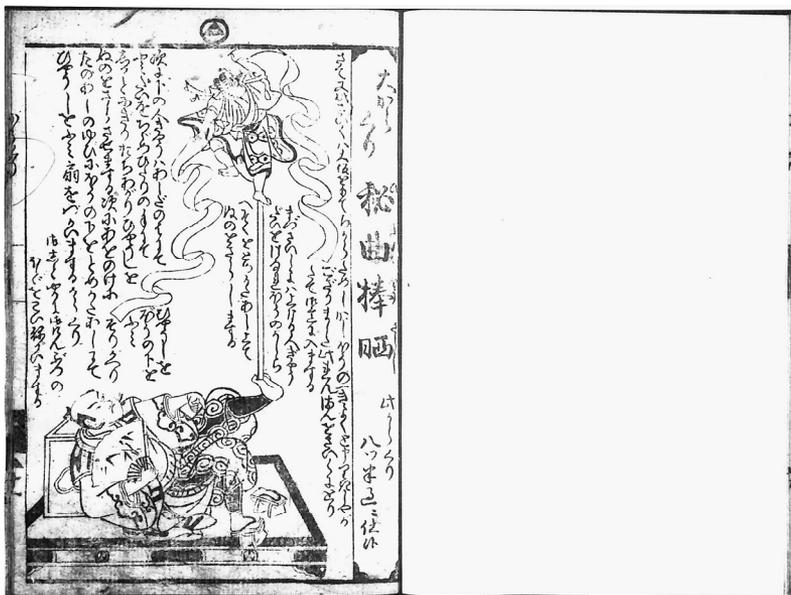
(9ウ)



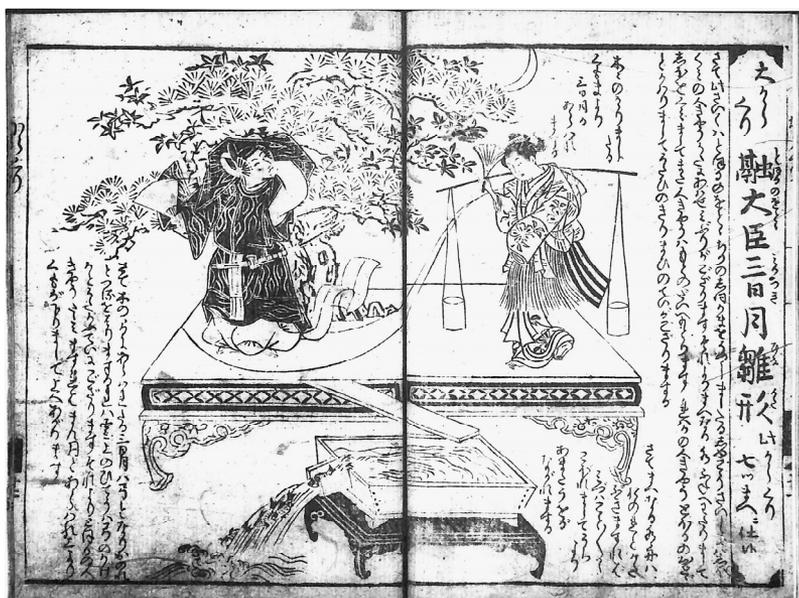
(10ウ)



(表紙)



(11オ)



(12オ)

(11ウ)



(13オ)



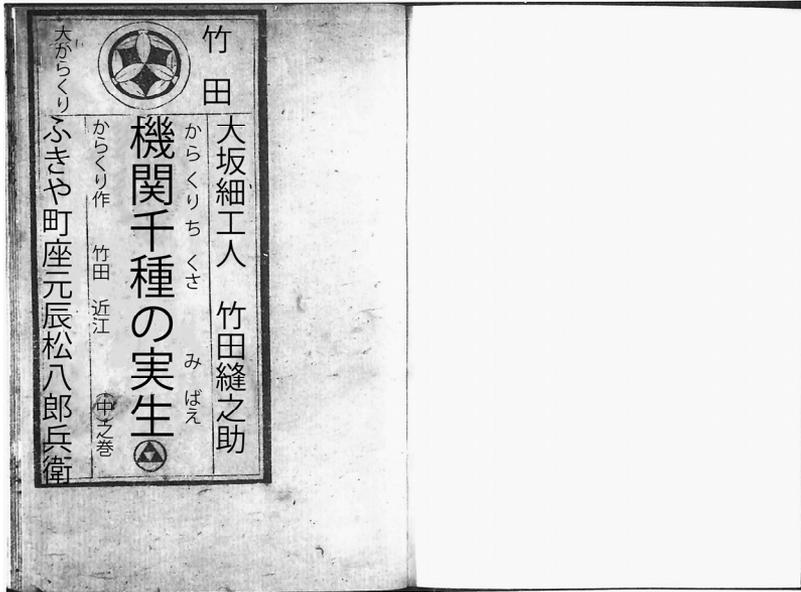
(12ウ)



(14オ)



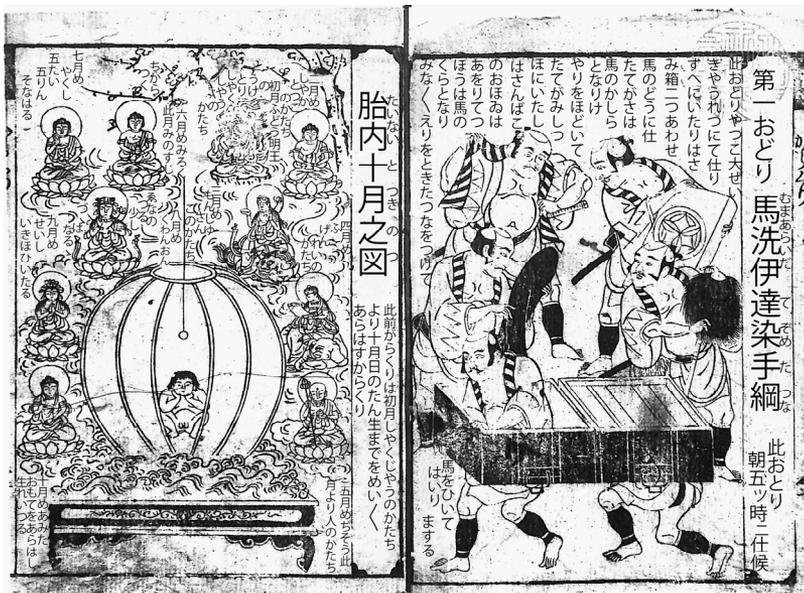
(13ウ)



(表紙)



(1才)



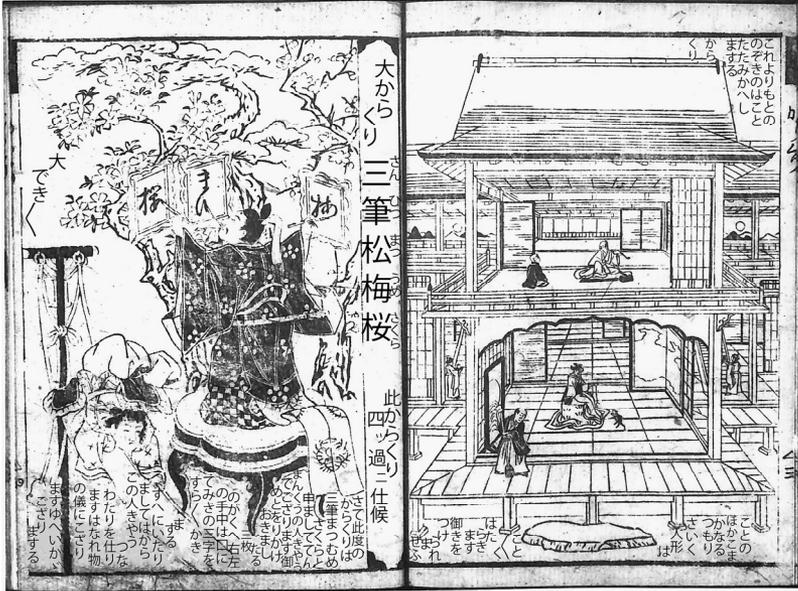
(2オ)

(1ウ)



(3オ)

(2ウ)



(4オ)

(3ウ)



(5オ)

(4ウ)



(5ウ)

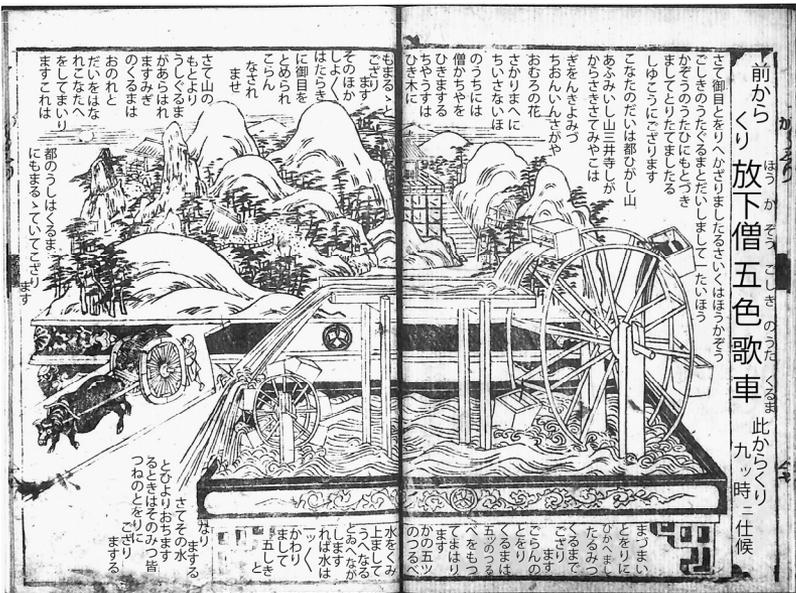


(6オ)



(7オ)

(6ウ)



(8オ)

(7ウ)



(9オ)

(8ウ)

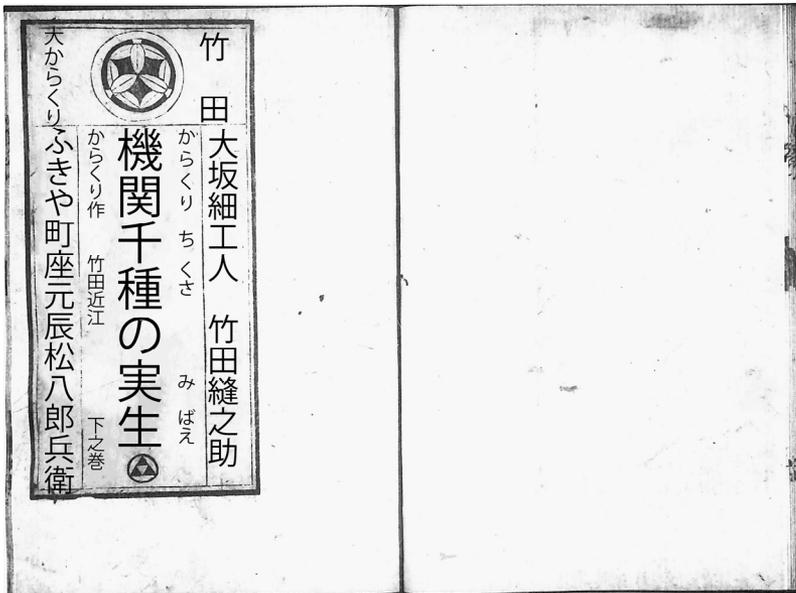


(10オ)

(9ウ)



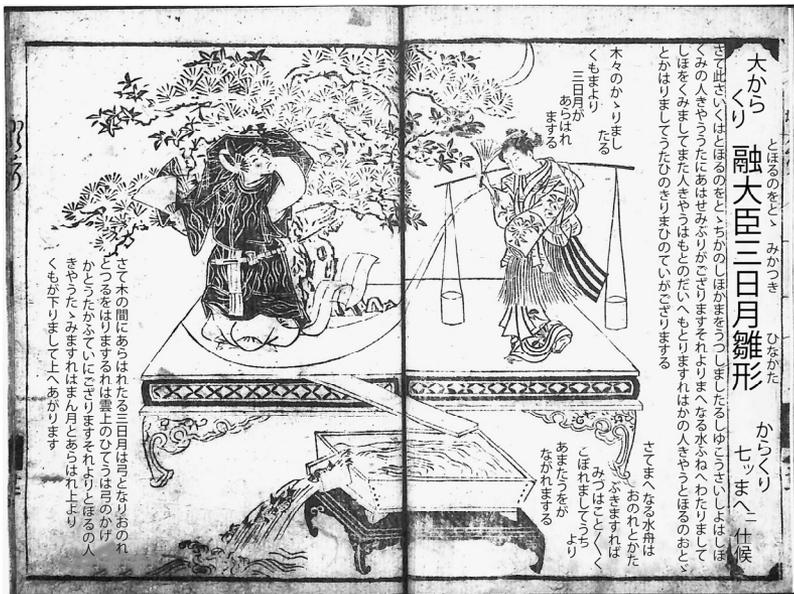
(10ウ)



(表紙)



(11オ)



(12オ)

(11ウ)



(15オ)



(14ウ)



(15ウ)

演目解説

馬洗伊達染手綱（踊り）

まず、奴の大鳥毛踊りがあり、その後、大名行列の立道具で神馬を作り、奴が舎人の姿になって段だらの手綱を引く。『若楓東雛形』には、手綱について奴の半纏の襟を解いて手綱とするとある。おそらくそれでよいのだろう。これによって段だら模様の手綱の意味がはっきりする。

胎内十月囃（からくり）

妊娠から出産に至るまで十月の間、守護仏がお守りくださる様を仕組んだからくり。初月不動明王から臨月阿弥陀如来に至るまで、その間、子宮に子種が宿り錫杖の形となり、人間の体が形作られるまでの胎内の様を表わす。砂時計からくり。

時頼熱田詣（狂言）

尾張熱田の大宮司が所領を悪七五郎むねまさに横領されて、今は神社の鳥居前の水茶屋の亭主となっている。最明寺入道（北条時頼）はしゆくや入道、びとう入道とともに都の勅使と偽り烏帽子直垂姿となつて、熱田大宮司の真心を探ろうと熱田詣でをする。しゆ

くや入道が水茶屋の女房に濡れかかったり、巫女となつて舞つてい
る女房にちよつかいを出したりする度に亭主が愠気する。やがて亭
主と女房が三大臣の前で舞の所作をする見せ場となる。大宮司は、
勅使になりました「しゆくや入道」と「びとう入道」の正体を見
破り、二人を懲らしめるのを見て、最明寺入道は水茶屋の亭主が熱
田の大宮司であり、女房がその妻であることを見抜き、本領安堵す
る。その後、本領安堵の件で意趣を抱く悪七五郎むねまさが家来と
ともに押し寄せるが、逆に大宮司に懲らしめられ、むねまさも棒縛
りにされ、一同追いやられて幕となる。全体として滑稽を旨とする
竹田芝居の子供狂言である。

邯鄲栄花春（大からくり）

最初は、のぞきの箱の上の法師の人形が鉦を打つと、箱が開けて
千畳敷の座敷と変わる。のぞきの箱の前にいた左右の子供は日輪月
輪と変わる。千畳敷の座敷の火燈口の絹を巻き上げると、女郎が炬
燵の上で猫を戯れつかせている。また、左右の梯子を登り、給仕す
る人形、長廊下を掃きそうじする人形がそれぞれに所作をする。二
階の障子を開けると、主人が辺りを見回し、煙草を吸う。最後に、
元ののぞきの箱に畳み返される。

三筆松梅桜（大からくり）

菅丞相（菅原道真）の人形が、額や机上の紙に「梅」「まつ」「桜」の三文字を書く文字書きのからくり。ただ書くのではなく、左右の手で同時に「まつ」「桜」の二文字を書き、その後口にくわえた筆で「梅」の一文字を書く。菅丞相の左右に配された二体の童子の人形が所作をする。松童子の人形は、二筋の綱を逆立ちで渡り、その間片手ずつ放して見せ、最後に人形が鉢植えの松となる。梅童子の人形は、台を離れて篠竹に取りついて竹をたぐって渡り、最後に人形が鉢植えの梅になる。ぜんまいの細工物からくり。

恋慕流恋歌口（おどり）

最初六人の虚無僧が踊り、虚無僧がおさなごととなり、再び虚無僧となる。最後は虚無僧の天蓋からかすきが下がって、単（ひとえ）の衣を纏ったかすき女となる。このように三態の姿となって、それぞれに踊る変化舞踊。演目名は虚無僧の尺八の曲名に由来する。

七曲神秘糸（前からくり）

唐土から日本の智慧を試すべく送られた七曲の通路に糸を通すからくり。通路の片方から蟻に糸をつけて反対へと通す。織姫の人形が七曲の両側を通した糸を左右の手に持った糸巻きで巻き取る。通

しただけの糸がどこまでも巻き続けることができる不思議を見せる。その後、人形は神鏡と幣帛に姿を変え、蟻通明神と拝まれ、七曲の通路を吊るす枠に紙を張り灯明を照らす。

生如来餅搗縁起（子供狂言）

善光寺縁起をもとにした本田義光と阿弥陀如来の話柄の子供狂言だが、詳細については不明。

諫鼓大平楽（大からくり）

太平の御代を寿ぐからくり。太鼓の上の鶏が鳴き声で時を告げ、撥で打ちもしないのに、太鼓がひとりでに鳴り、大坂表の神事の太鼓や芝居の槽太鼓などをそれぞれに打ち分ける。太鼓の中に仕掛けがないことを見せるために、太鼓の皮を開いて中を改める。そして、一元に戻すと、太鼓が再び打ち出される。

福寿草笑顔春遊（大からくり）

布袋の人形を引きだして太鼓を打たせる。六体の唐子の人形がさまざまな遊びの後、肩車をして三重に積み重なり（二人の上にさらに二人、その肩の上に二体の人形が上下に乗る）、一番上の唐子人形が、梯子状の房や木の枝に取りつき、反り返って吊るしてある太

鼓を打つ。布袋人形も腹をへこへこ動かしたり、さまざまな身振りをして太鼓を打つ。唐子人形の下から亀が現れ、唐子人形を乗せたまま舞台を走る。布袋人形は後に宝船に変身する。

住吉汐干の白鷺（おどり）

最初は貝拾い（潮干狩り）の娘の踊りから、住吉踊りへと変身し、最後は住吉踊りが白鷺になって虚空に飛んでいく変化舞踊。

放下僧五色歌車（前からくり）

能『放下僧』の切の小歌にあわせて、最初は、都近江の飾り物系のからくり台で、名所・風物の飾りを見せる。次に、五色水車のからくり台で、水車と五色のからくりを見せる。牛車のからくり台で、牛車が台の上を進む様を見せる。その後、もとの飾り物系のからくり台で、僧が茶を挽く様を見せる。

日高川現在鱗（狂言）

『日高川入相桜』を素材とする狂言。詳細は不明。

道成寺佛桜（大からくり）

最初、能『道成寺』の白拍子が地謡にあわせて拍子を踏み、その

後、ツレ僧が居眠りをする隙に、釣り鐘を引き被き白拍子は鐘のうちに飛び入る。祈りの段で引き上げられた鐘から蛇体となった白拍子の女が現れる。女は撞木に取りついて鐘を突き、やがて、もう一つのからくり台に設置された柳の枝をたぐって渡り、そこで拍子を踏む。

風流花車駕（踊り）

最初は、下がり帽子を着た振袖の女中が花桶を引き出し踊り、次に皆が六尺と変わり、花桶車を乗物に仕立てて踊る。女中から六尺へと変わり、花桶車が乗物に変化する変化舞踊である。

日坂八丁鉦（前からくり）

佐夜ノ中山の八挺鉦のからくり。最初、歌念仏の文句に合わせ、三味線につれて八挺鉦を叩いて、いろいろの調子で鉦の音を打ち分ける。鉦がしだいに手元へ上がり撞木を高く構えもする。

昔真斯猿島敵討（狂言）

かづまとだら介が春駒となって猿ヶ島へやってくる。親猿、娘猿が登場し、娘猿がかづまに恋慕する展開か。絵本としては他に例がないので、詳細は不明。

秘曲棒晒（大からくり）

大坂にいた「かしぼうの一曲」という力持ちの芸をからくりにしたもの。からくり台に乗った力持ちの人形が棒を持っており、その先端では布晒しの人形が両手に持った長い布を勢いよく振る。最初は、上の人形がからくり台から離れて棒の先端で足を固定し、片足をあげて布を晒す動作をする。下の力持ちの人形は、足駄で拍子子を踏み、体を縮めて片手で棒の下を握って立ち上がり、拍子を踏んで布を晒させる。次に、下の人形が仰向けに反り返って、片足の指に棒の下端を固定し、もう一方の足で拍子を踏む。下の人形は立ち上がったり、座ったりという動作を行うが、棒を持っていない方の片手で扇を上下させる動作をする。すべて離れ物のからくりである。

融大臣三日月雛形（大からくり）

海女の人形がからくり台から前に設置されている水船に渡り、塩汲みの所作をして、その後、元のからくり台にもどる。海女が融の大臣の姿に変身して塩竈の謡いの切舞の所作する。もみじの枝から虹のかけ橋が下がり、大臣はかけ橋に移り、月に変化して空へ上っていく。やがて満月となり、その中に月宮殿が現れる。また、宙に浮かぶ三日月は、その形が釣針に変化する。さらに、三日月は弓の形となり、矢を放つと、こちらの枝から鳥があまた飛び去る。後に

三日月は船となり、なからウサギが現れて船を漕ぐ。船は帆を上げて進み、やがて舞台へ降りて楽屋へ入る。先の水船は、あらかじめ、なかを改めてから水を入れておき、後にその水船から魚が多く湧き出るからくりとなっている。

業平姿写絵（おどり）

最初は業平の女姿で踊り、次に皆廻り灯籠の内に入ると相撲取りの影となり、次に灯籠の内から八尺ほどの関取の大男が出て所作をする変化舞踊。

七化追分姿（前からくり）

大津絵（大津の追分、三井寺周辺で参詣の土産に売られた庶民的な絵）の人形の七変化のからくり。藤の花を肩にかけた娘、鬼の念仏、若衆の枕返し、座頭へと一体の人形が次々に変化していく。次に奴の人形が酒をのみ顔を赤くして姿を瓢箪坊主に変える。奴の座っていた酒樽が鯰となり、瓢箪坊主とともに瓢箪鯰の絵姿となり、鯰が舞台を動き回り楽屋へと入っていく。

狸都侍昔噺（狂言）

親の敵いわせ三太夫を討ち取ろうとする春木うこんと母らの物語

で、す山みんぶが忠臣として仕えるか、絵本の記述だけでは詳細は不明。

かいこ温鶏（大からくり）

鶏が卵を温める仕草があり、羽交いの下から生きたひよこが誕生する。その後、ひよこを鳥籠に入れて絹を掛けておくと、ひよこが生きた親鳥となって鳥籠から飛び出すからくり。鳥籠に仕掛けのないことを示すために鳥籠を分解して見せる。

御伽傀儡師（大からくり）

最初は、歌三味線にあわせて、傀儡師（首から提げた人形の箱の上で指人形芝居を演じた大道芸人）の首から提げた箱から登場した唐子の人形が、両手にチャップパ（小さなシンバル）を持って踊り、その後、傀儡師の人形の上半身が箱の中に畳み込まれ、場面が転換して「船弁慶」となる。海上から義経主従を恨みに思い、薙刀を振り回して荒れ狂う怨霊平知盛を弁慶が祈り伏せる。この場面は謡曲の文句をそのまま用いている。その後、再び、傀儡師がもとの姿となり、箱の中から山猫が登場し囃子に合わせて動作して、最後に観客の方に飛び出していく。

右の解説に際し、参照した絵画資料の刊年を参考までに次に記す。
からくり絵尽し『機関竹の林』宝暦七年（一七五七）六月以前。
からくり絵本『竹田新からくり』宝暦八年（一七五八）正月。
からくり絵本『機関千種の実生』明和四年（一七六七）頃。
からくり絵本『若楓東雛形』明和四年（一七六七）頃。